

# 活動報告

## かごしままちなか文化彩2025

令和7年11月8日(土)に開催された、かごしままちなか文化彩2025に出展しました。

黎明館のブースでは「くずし字で書いた自分の名前入りキーホルダーづくり」、「こども歴史体験コーナー」、「火おこし体験(火がおこる直前までを体験)」の場を提供しました。

また、先着100名様にオリジナルぬりえのプレゼントもあり、多くのお客様で賑わいました。



学芸員  
EYES!  
第16回  
茂姫(広大院)肖像  
学芸員イチオシの  
収蔵資料を紹介します。

## 数少ない、藩主の家族の肖像

近世薩摩藩の藩主の中で肖像が残っているのは、初代藩主家久(初め忠恒)、8代藩主重豪～12代藩主忠義(ただし忠義は写真)までに限られています。2代藩主光久については、「犬物図」(尚古集成館蔵)の中に騎馬像が小さく描かれているのみです。たとえ小さな像であっても、姿を伝える資料が残っていればその人物の様子を伺い知ることができますが、全く肖像が残っていない藩主も少なくありません。ましてや藩主の妻や子供の肖像が残る例は非常に稀です。そのような状況で、8代藩主重豪の娘茂姫(のち広大院)は肖像が残されている数少ない女性の一人です。

茂姫は11代将軍徳川家斉の正室になった女性です。この縁組は、茂姫が生まれる前に、8代将軍徳川吉宗の養女として5代藩主島津継豊の後室となった竹姫の指示によるものとされ、島津家が茂姫と一緒に橋徳川家の豊千代(のち家斉)との縁組を申し入れ、婚約が成立します。しかしその後、豊千代が10代将軍徳川家治の養子となると、幕府老中から縁組に異議が唱えられたようです(『旧記雑録追録六』、2528号文書「島津重豪御内意書」)。島津家がこの縁組は竹姫が決めたことである旨を主張すると、養女とはいえ徳川家の一員の竹姫が決めたことに将軍の家来である老中が反対することはできませんでした。しかし老中側は、将軍の正室は慣例として宮家の女性か摂家の女性であったことから、茂姫が大名の娘であったことが問題になったようです。これを受けて、重豪は老中松平康福と相談し、茂姫を一度近衛家の養女にして近衛家から嫁ぐ形を取りました(『旧記雑録追録六』、2633号文書「幕府指図書」)。

江戸城大奥に入った茂姫は、陰ながら島津家のために努力します。父重豪の三位昇進を弟で9代藩主だった斉宣と図り、また、茂姫周辺から10代藩主斉興に送った手紙(「南部信順養子につき御内用書付(仮題)」)八戸市立図書館蔵、請求番号2-7-0-0-14)によると、弟の篤之丞(のち信順)が八戸藩南部家2万石の養子に入る話が出た際には、茂姫が「何とか(篤之丞が)藩主になれるように、取り計らってほしい」と述べています。



茂姫(広大院)肖像 玉里島津家資料

この肖像は、包紙に「広大院様御正像 住吉内記弘定筆」とあり、住吉派7代目の絵師で幕府の御用絵師を務めた住吉弘貴(初名弘定)が描いたものと考えられます。顔は彩色されていますが、着物は輪郭のみです。そのため、この絵は弘貴が描いた下絵の可能性があります。

企画資料係長 新福 大健 (歴史担当)

**黎明館 NEWS 特別版**

重要文化財  
広田遺跡出土品が  
韓国で展示されました！

重要文化財に指定されて  
初めての海外出陳

韓国と日本が国交を正常化してから60周年を迎えた今年、韓国・釜山にある国立海洋博物館で、韓国と日本の貝製品を集めた展覧会「*조개,かい*—貝殻に刻まれた韓国と日本の足跡—」(会期: 2025年12月2日～2026年3月2日)が開催されています。韓国の古墳から日本産の貝が出土するなど、日本と韓国は古くから文化交流を行っていたことがわかっています。韓国各地の博物館をはじめ、熊本、佐賀、福岡など日本の博物館からも貝製品が集められたなか、黎明館が所蔵する重要文化財「広田遺跡の出土品」も出陳されました。これまでにも一度、広田遺跡出土品は韓国で展示されたことがありましたが、平成18(2006)年に重要文化財に指定されてからは初めての海外出陳となりました。

12月2日に行われた開場式では、当館の谷口館長が日本側の博物館を代表として「この展覧会を通じて、韓国と日本が共有してきた海の文化の豊かさと、未来へつながる友情の絆を深める契機になること、そして両国の博物館や研究者の協力が今後も新たな交流と理解を生み出していくことを願っています」と挨拶しました。



重要文化財  
広田遺跡出土貝製品

## 黎明館のフカボリ 19

敷致散策のススメ

### 石敢當 (せっかんとう/いしがんとう)

石敢當は、自然石や長方形の平らな石に「石敢當」の文字を刻んだ魔除けです。「石敢當」の他に、「石散當」「石嚴當」などの文字が刻まれた石もあります。

石敢當を辻や三叉路のある場所にはめ込んだり、側に立てたりします。これは辻や三叉路が悪鬼の横行する場所で、特にT字型の道の突き当たりはよくない場所と考えられていたからです。中国から伝わったものと考えられ、南九州から南島各地にかけて多く見られます。



黎明館では、屋外展示の民家(樋の間二つ家)と茶室(楠芳亭)に向かう、T字の突き当たりに石敢當が設置されています。また、常設展示2階民俗部門でも展示しています。